

## 自由集会「哺乳類学に求められる『サイエンスコミュニケーション』を探る」

### @哺乳類学会を終えて

林 航平（ワイルドライフマネジメント事業部 計画策定支援室）

#### 企画のきっかけ

緑豊かな江別の地、酪農学園大学で開催された日本哺乳類学会 2025 年度大会。熱気に満ちた研究発表が繰り広げられた4日間の最終日、2025 年 8 月 25 日、私たちは自由集会「哺乳類学に求められる『サイエンスコミュニケーション』を探る」を企画・開催しました。

近年、科学技術の社会における役割はますます大きくなり、研究者が専門分野の壁を越えて社会と対話することの重要性が叫ばれて久しいです。特に、愛らしい姿で人々を魅了する一方で、農林業被害や人獣共通感染症、あるいはクマ類の市街地出没といった深刻な社会問題の原因ともなる哺乳類を扱う私たちにとって、その研究成果を社会に分かりやすく伝え、多様なステークホルダーと対話を重ねていくことは、もはや避けては通れない責務と言えます。

しかし、こうした状況にもかかわらず、哺乳類学（あるいは野生動物管理学）におけるサイエンスコミュニケーション（以下、SC）はまだまだ黎明期にあり、研究者が持つ専門的な知見と社会とが十分に繋がっているとは言い難い状況です。研究者と社会との関わりには、まだ大きな隔たりがあると感じています。そうした問題意識を抱える中、筆者自身が北海道大学の科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）で SC を学んだ経験は、一つの転機となりました。そして、偶然にも学生時代からの知人であった須藤さん（文一総合出版）も CoSTEP を受講していたことが判明。さらに記憶を辿ると、北海道大学ヒグマ研究

グループの知人にも CoSTEP の修了生が複数名いることを思い出しました。

**「野生動物の調査研究の経験や知見を持つ CoSTEP 修了生を集めれば、哺乳類学における SC の新たな可能性を探る、意義深い集会が開催できるのではないか？」**

こうして、哺乳類学会で初となる「サイエンスコミュニケーションの自由集会」を企画・開催するに至りました。（ちなみに、学会が北海道で開催されたこと、そして CoSTEP が 20 周年記念を迎えたことなど、SC の自由集会を開催するのに様々な舞台が整いすぎていたのも、私たちの背中を押してくれた理由の一つです。）

#### 多様な視点からの話題提供

本自由集会は、前述したような問題意識を共有し、哺乳類学に関わる SC の現状を多角的な視点から明らかにし、今後の新たな可能性を発見することを目的としました。企画当初は「30 名くらいが参加してくれれば御の字だろう」と考えていましたが、当日はその予想を大きく上回る約 50 名の方々にお集まりいただくことができました。会場に集まってくださった皆様の姿を前に、このテーマへの関心の高さがうかがえ、大変嬉しく思ったことを覚えています。

集会では、多様な立場で SC を実践されている 5 名の演者に、それぞれの立場から活動内容や課題、そして未来への展望を語っていただきました。

## 1. 野生動物管理を地域と協働する（林航平・株式会社野生動物保護管理事務所）

まず筆者の私、林からは、「野生動物管理は、サイエンスコミュニケーションの視点で見ると『欠如モデル』で止まっていないか？」という問題提起から発表を始めました。野生動物管理という分野は、黎明期から発展期を経て、現在は人口減少や市街地出沒といった新たな課題に直面する「飛躍期」にあるとされます。一方で、SCの歴史は、専門家が一方的に知識を伝える「欠如モデル」から、双方向の「対話モデル」へと変化してきました。この二つの歴史を重ねた時、私たちの現場でのコミュニケーションは、いまだに「市民は知識が欠如しているから科学を理解しないのだ」という前提に立った「欠如モデル」に留まっているのではないか、というのが私の問いです。私自身、入社間もない頃、ニホンザルの対策で「データ上はこうすれば被害は減ります！」と科学的な正しさだけを主張し、地域のマンパワー不足や高齢化といった「文脈」を無視して全く受け入れられなかった苦い経験があります。この反省から、受け手の状況を考慮する「文脈モデル」や、地域の経験知を尊重する「素人の専門性モデル」、そして意思決定に市民が参画する「市民参加モデル」の重要性を痛感しました。最終的に、これらの対話モデルを発展させ、科学コミュニティや行政、企業、メディア、そして一般の人々が連携し、地域に根差した知を共に産み出し継承していく「知産知承モデル」のエコシステムを、野生動物管理の分野

でこそ共創していく必要があるのではないかと提案しました。

## 2. 都市住民と野生動物問題を考えるコミュニケーション（伊藤泰幹・北海道大学）

伊藤（泰）さんからは、札幌市におけるヒグマの市街地出沒という喫緊の課題を題材に、都市住民とのコミュニケーションのあり方を探る「ヒグマテーブル」と名付けた先進的なワークショップの実践が報告されました。対策には住民参加が不可欠ですが、これまで行政と地域コミュニティとの双方向のコミュニケーションの場は十分にはありませんでした。そこで伊藤さんたちは、市の「ヒグマ対策重点エリア」に指定されている円山西町町内会と協働し、地図を用いたワークショップを企画・実践しました。このワークショップのユニークな点は、参加者が「クマ目線」と「人目線」の両方から地域を見つめ直す点にあります。「クマ目線ワーク」では、ヒグマがどこを通りそうか、何に誘引されそうかを地図上に書き込むことで、参加者は自らが暮らす地域の潜在的なリスクを主体的に発見します。次に「人目線ワーク」では、学校の通学路など、「絶対にヒグマに出てきてほしくない場所」を出し合い、その理由を共有します。このプロセスを通じて、参加者は専門家から与えられる「正解」を待つのではなく、地域の多様な価値観を互いに認識し、その地域ならではの適切な解決策、いわば「成解」を創り出していくのです。この取り組みは、SCが単なる知識伝達ではなく、地域の当事者意識を醸成し、具体的な行動変容や合意形成を促す強力なエンジンとなることを示す、説得力のある事例でした。





### 3. 地域の博物館と地域をつなぎたい（伊藤彩乃・愛媛県久万高原町 地域おこし協力隊）

ヒグマ研究の経験を持つ伊藤(彩)さんからは、クマのいない愛媛県久万高原町で地域おこし協力隊として活動するというユニークな立場から、地域のミュージアムを SC の拠点として活性化させる試行錯誤の様子が報告されました。人口約 7000 人のこの町には、山岳博物館、美術館、天体観測館という 3 つもの文化施設が存在します。しかし、町民にとっては「なんだか格式高い」という心理的な壁があり、その魅力が十分に伝わりきっていないという課題がありました。伊藤さんはこの状況を打開するため、SC の視点を取り入れた様々なアプローチを試みています。例えば、「遠い存在」だった学芸員の人柄を紹介するウェブ記事の作成や、「本」を媒介としたイベント「くまこうげんブック&ミュージアム」の企画です。別の切り口からアプローチすることで、これまでミュージアムに足を運ばなかった層を呼び込み、自然な形で町



の文化施設に興味を持ってもらうきっかけを創出しています。さらに、あえて町にはいない「クマ」をテーマにしたサイエンスカフェを企画するなど、外部のテーマを取り込むことで新たな関心を喚起する試みも進めています。伊藤さんの発表は、SC が地域に埋もれた資源の価値を再発見し、地域活性化へとつなげる触媒となりうることを、現在進行形の熱意と共に示してくれました。

### 4. ボードゲームで伝えるエキノコックス～「ECHINO!」の開発と運用～（石田隆悟・NHK エンタープライズ）

石田さんからは、人獣共通感染症であるエキノコックスという目に見えない脅威を、ボードゲームという誰もが楽しめる媒体で伝える画期的な取り組みが紹介されました。多くの人が抱く「なんとなく怖い」という漠然とした恐怖を、リスクを正しく理解し行動する「正しく恐れる」状態へと導くため、プレイヤーが能動的に関わる体験型のツールとしてボードゲーム「ECHINO!」が開発されました。このゲームの最大の特徴は、プレイヤーが「エキノコックス」そのものになりきり、「最も多く産卵すること」を勝利条件とする点です。恐怖の対象である寄生虫の視点に立つという斬新なコンセプトにより、プレイヤーは楽しみながら、キツネとネズミを行き来する複雑な生活環を自然に学ぶことができます。ゲーム盤には「ベイト散



布」というイベントが組み込まれており、駆虫薬の有効性を自らの「体験」として理解することができます。ルールブックさえあれば専門家がいなくても遊べる自己完結性から、公園でのワークショップや大学・高校の授業など様々な場面で活用され、テレビ番組などでも取り上げられています。石田さんの発表は、ゲームというメディアが持つ力を最大限に活用し、難解な科学的知見を「面白い体験」へと翻訳した、SC の実践例でした。

## 5. 本という媒体について（須藤哲平・文一総合出版）

最後の話題提供者である須藤さんには、出版社の編集者という立場から、「本にできることはまだあるかい？」という問いを掲げ、書籍という媒体が現代の SC において果たす独自の役割と未来への展望についてお話いただきました。まず、出版不況やマニアの市場がある鳥類や昆虫類に比べ、哺乳類は売上げにくいといった厳しい現実を直視するところから講演は始まりました。「作っただけでは売れない時代」において、「どんな本を、誰のために、どう作って、如何にして売るか」という戦略的な視点が不可欠であると指摘されました。その具体的な実践例として、須藤さんが編集を担当された『はじめて学ぶ哺乳類』の制作過程が詳細に紹介されました。この本は、「獣医学部の1年生だった頃の自分に届けたい」という思いから、高校生から大学初学者までを読者として明確に想定し、徹底した読者目線の編集方針が貫かれています。さらに、本は「出版したら終わり」ではな

い点が力説され、出版イベントや SNS 発信などを通じて、本をハブとした双方向的なコミュニケーションを創出する活動の重要性が示されました。

## 総合討論：多様な実践をつなぐ視点

5 名の話題提供を受け、後半は北海道大学の池田貴子さんをコメンテーターにお迎えし、フロア全体での総合討論へと移りました。池田さんからまずは、ご自身の都市キツネの研究やエキノコックス対策における SC の実践経験を踏まえ、「動物問題は人間問題である」という重要な視点が提示されました。観光資源としての「かわいいキツネ」と、感染症を媒介する「危険なキツネ」というように、同じ動物が多様な価値観の中で捉えられ、人々の間でコンフリクトが生じる。この構造は、話題提供にあったクマの問題とも共通します。

その上で池田さんは、今回の 5 つの発表を貫く共通の視点として「知産知承モデル」と「社会関係資本」という二つの概念を提示しました。「知産知承モデル」とは、科学コミュニティ、行政、企業、メディア、そして一般の人々といった多様な社会の構成要素が連携し、地域に根差した知を共に産み出し、継承していく SC のあり方です。まさに、5 名の実践は、それぞれ異なるアプローチでこのモデルを体現しようとする試みであると位置づけられました。

そして、そのモデルを駆動させるエンジンとなるのが「社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)」、すなわち人々の信頼関係やネットワークです。住民同士の強い絆(ボンディング型)、市民と研究者といった異なる集団を橋渡しする関係(ブリッジング型)、そして行政や専門家と市民を結びつける関係(リンキング型)。SC 活動は、単に知識を伝えるだけでなく、こうした多様な「つながり」という財産を育むプロセスでもある、と池田さんは指摘しました。



## おわりに

あっという間に予定の2時間が過ぎ、後ろ髪を引かれる思いで閉会となりました本自由集会。開催後のアンケートでは、今後の研究や実践に「活かすことができるものが得られた」という回答も同様に高い評価をいただきました。さらに、「次の哺乳類学会でもSCの集会があれば参加したいか」との問いには、ほぼ全ての回答者から肯定的な回答が寄せられ、このテーマに対する継続的な関心の高さが示されました。自由記述欄には、「SCのモデルについて新たな気づきを得られた」「具体的な事例が参考になった」といった声や、「今後もSCの集会を継続してほしい」という熱心な要望が数多く寄せられました。

もちろん、反省点もあります。哺乳類学会ではおそらく初となるSCの自由集会ということもあり、各登壇者の発表に熱が入り、話題提供のボリュームが大きくなりすぎてしまいました。アンケ

ートでも「対話型のワークや質疑応答の時間を増やしてほしい」というご意見をいただいたように、フロアの皆様との総合討論の時間を十分に確保できなかったことは、今後の課題として真摯に受け止めたいと思います。一方で、初の集会であるからこそ、SCの基本的な概念や多様な実践の全体像を丁寧に示すことは、今後の議論の共通基盤を作る上で避けては通れない過程であったとも考えています。

今回の集会は、あくまで始まりの一步です。この熱を一過性のものに終わらせず、継続的な情報交換や連携につなげていくことが重要です。

最後になりますが、ご多忙の中、快く話題提供をお引き受けくださった登壇者の皆様、そして活発な議論で会を盛り上げてくださった参加者の皆様、本集会の開催にご尽力いただいた大会実行委員会の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

### 表紙の絵

初めての挿絵は、筆の代わりにティッシュを使いました。思い通りに描けないその不確かさが、かえって野生の気配に近いように感じます。滲みや揺らぎの中に、サルたちの動きや空気がふと浮かび上がる。そんな偶然に身を委ねながら描いた一枚です。

中嶋 英輝（ワイルドライフマネジメント事業部 広島事業所）